

ものづくりで孤独は消せる

オリイ研究所代表取締役CEO

吉藤 健太郎
よしふじ けんたろう



©2020 Hiroshi Inoue

ものづくりの師匠

私には、ものづくりの師匠がいる。「奈良のエジソン」と呼ばれていた久保田憲司先生である。私は中学生の時に、奈良県立王寺工業高校の教諭であった先生と出会い、同校への進学を決意した。入学後、先生の指導のもとで電動車椅子の開発に夢中になった。久保田先生は2001年当時、一輪車を乗りこなす最先端のロボットの開発に成功していた。

私は、電動車椅子でJ-S-E-C (Japan Science & Engineering Challenge) という全国規模のコンクールに出場し、文部科学大臣賞を受賞、インテルが主催する世界大会にも出場した。そこに集まった世界の高校生達は、「自分の一生を今、取り組んでいる研究に捧げる」と迷いなく言い切っていた。私はその言葉にハッと、残りの人生で何ができるかを真剣に考えるようになった。

心の車椅子「OriHime」の誕生

私達が世に出した遠隔操作型の分身ロボット「OriHime」は、物理的に移動し誰かと声を出して対話しながら役割を果たすという、人間本来の行為が難しい人達のためにつくられている。人工知能を

使っているわけではなく、生身の人間が操作する「心の車椅子」と言えるものである。

人は、移動、対話、役割という3つの自由を失うと、生きづらくなり孤独に陥る。私は、この社会から孤独を消したいと考え、「OriHime」を構想した。十代の前半、かなりの期間、引きこもりの状態になってしまった私は、家族にひどく迷惑をかけ、支えてくれた友人達に言葉も返せなかった。社会は、小さなことであっても、互いに役に立つことをし合っている。「ありがと」と言い合うことで成り立っている。あの頃の私は、何も役に立てない自分に情けなく、絶望感に襲われていた。

我慢をしなくてもよい社会

「OriHime」の開発を始めたのは大学在学中の2009年であり、既に10年が経過した。それが曲がりなりにもうまくいっているのは、4歳の時に交通事故故によって頸髄を損傷し、呼吸器を装着したまま寝たきりの状態になってしまった番田雄太との出会いが大きい。彼は20年もの間、入院生活を続けていたが、唯一動く顎を使ってパソコンを操り、ネット上で「OriHime」を見つけ、2014年から亡くなる2017年まで開発に参画してくれた。全国各地へ講

Essay 時の調べ

演にも一緒に出掛けた。

番田が開発に加わったことで私は、「障がいを持つっていても、難病に苦しんでいても、やりたいことは我慢しないでほしい」という想いが強くなった。我慢に加えて、「努力や根性に頼らなくても社会参加出来る」という課題を設定し、そのための新しい機能や形状、デザインを「Oritime」に与えていった。その評価をしてくれたのが番田だった。

場を共有する意味

新型コロナウイルスのパンデミックでは、それまで自分の意志により自由に動くことの出来ていた世界中の健常者が、日常の生活すらままならず、大きなストレスを抱えた。もし、自分の分身ロボットに行きたいところに行ってもらって仲間と語らい、楽しい雰囲気それぞれ遠く離れたところで共有出来たならば、さほど変わらない精神状態を保つことは出来ただろう。



オンライン会議用のハード、ソフトは、日々、進化していて、企業として社員にリモートワークを課すには十分なレベルにある。しかしそれらは、人の想いや感覚、場を共有する意味を踏まえてつくられていない。「もうリモートワークなどしたくない」と思っている人も増えているに違いない。

若者がつくる新しい「コミュニティ」

日本では、世界のどの国より急速に高齢化と人口減少が進んでいる。全ての人々の能力や社会参加への想いを活かせる、世界最先端のダイバーシティ社会の構築を急がなければならないが、それは若者に託すべきだ。

ゲームチェンジャーは、いつの時代も若者である。私は今33歳だが、若者とは私より下の世代の十代、二十代の者達である。その世代は、オンライン上にサロン(私塾)を開いている者も多い。

オンライン上に出来るコミュニティは、日本の村社会、あるいは会社組織のような同質的で上意下達的なものとは明らかに異なる。誰もが対等で出入りは自由で、知見、アイデアを披露し合う場である。年齢や経歴、経歴など誰も意識しない。DX(デジタルトランスフォーメーション)時代のコミュニティは逆年功序列なのである。

金融資産を持つ多くの高齢者は、そうした新しい知見、アイデアを持つ若者を見つけ出し、パトロンとして支援してほしい。高齢者こそ若者から学び、若者を支えてほしい。

誰もが「ありがとう」と言われるために

私も下の世代から積極的に学び、「この世にないのならば、つくる」という意識を常に持ち、誰かから「ありがとう」と言われるものづくりを行ってきたい。高齢者や障がいを持つ人たち、難病の患者さんたちが「Oritime」を使うことで出来ることが増え、社会の中で役割を果たし、それによって彼らが周りから、「ありがとう」と言われる存在になれるよう力を尽くしたい。

略歴

吉藤オリイ(吉藤 健太郎)

孤独解消を目的とした分身ロボットの研究開発を独自のアプローチで取り組み、自身の研究室を立ち上げ、2012年株式会社オリイ研究所を設立、代表取締役所長。青年版国民栄誉賞「人間力大賞」、スタンフォード大学EdoocCamp日本代表、ほかAERA「日本を突破する100人」、フォープス誌が選ぶアジアを代表する青年30人「30 Under 30 2016 ASIA」など。2018年デジタルハリウッド大学大学院特任教授就任。著書に『孤独』は消せる。(サンマーク出版、2017年)ほか。

